

わが国土はアジア大陸東方洋上に横たわる小さな島々からなりたっているにもかかわらず最高三千メートルの高山や富士山を代表する秀麗なはずかずの火山や温泉にめぐまれている。また山岳のみならず河川や海岸あるいは島嶼の形態も多彩をきわめているし、植物の種類も多く、四季の変化と相まって国土全体が世界の公園国の名にふさわしい風光明媚なところとして知られている。ところでわが国土の自然が多彩であるということはわが国土全体を巡る自然環境が不安定で自然界の異常現象に見舞われやすい国、すなわち自然災害の発生しやすい国ということになるばかりか、事実その通り古来しばしば自然災害に見舞われ続けたことはわが国の災害の歴史をふり返るまでもない。

もつとも古来、毎年のように自然災害に見舞われ、そのつど甚大な被害を蒙ってきたわが国でも明治以後、欧米先進国の近代科学が導入され、自然災害の直接的な原因である自然界の異常現象のメカニズムが判明するにつれ、防災対策もおくればせながらも軌道に乗り始めた。その結果、自然界の異常現象による人的、物的被害額を軽減する方向にむかつてはきているが、自然災害発生のメカニズムは近代的防災科学がめざましい発達を遂げてきた現在でも不明な点が少くない。それどころか、われわれの生活水準が高まり、生活様式が複雑になるにつれ、両者のからみ合いは複雑多彩

な要素をもつにいたり「天災は忘れたころにやってくる」どころか、毎年のようにわが国内のどこかは自然災害に見舞われるにいたり、近代社会における自然災害発生メカニズムの科学的究明が急務になってきた。

以上のように考えてくると歴史地理学会が第十八回大会で「災害の歴史地理」を共通の研究テーマとして採用された意義はきわめて重要であったのみならず、この大会における篤学の人たちの研究発表を中心として集録された本紀要はその内容が災害による国府の移転というユニークのものを始め、わが国各地における水害、防災林、崩災、治水の歴史地理その他というぐあいに多方面の研究にわたっており、当面の急務とされている防災科学確立の第一歩として学界に貢献することがきわめて大きいといわねばならぬ。われわれは歴史地理学研究者による、このような研究の集積によって当面急を要している防災科学が確立され、災害国日本が災害のない平和な働きやすい国として一日も早く生れ変わることを念願してやまず、求められるままに序文をしたためた次第である。

なお、本書の上梓にあたっては財団法人畠山文化財団から多額な助成金を賜わったことを付記し謝意を表したい。

昭和五十一年一月三十一日

稲見悦治